

五 ムラとイエの信仰

(一) ムラの信仰

ムラには信仰の対象となったものが実に多い。神社や寺院の境内、道の辻の祠堂に、また、祠堂もなく風雨にさらされたままのものや、ムラ内だけにとどまらず遠く離れた山中にまで及んでいる。信仰の対象となった神仏は神道・仏教的なものから民俗的なものもあり、土着の神もあれば外来神もあり、あるいは自然神もあれば人格神もあるというようにその素性も性格も種々雑多である。信仰の多くは個人で信仰されるのではなく、集落全体で信仰したり、あるいは古賀内で、仲間というように多様な信仰形態がとられており、明治以降に新たに勧請された神仏も多い。

なかでも講という信仰形態をとったものが顕著な動きを見せていた。「講」は、宗教上あるいは経済上の目的を達成するために、志を同じくする人々によって組織された社会集団の一つで、村落社会のなかで大きな機能を果たしてきた。講という語は、本来は仏典を講究する僧尼の研究集会を指していたが、仏教が世俗化するにつれて、民間信仰集団など同じ信仰に結ばれる集団をも指すようになった。さらに時代とともにいっそう進展し、生

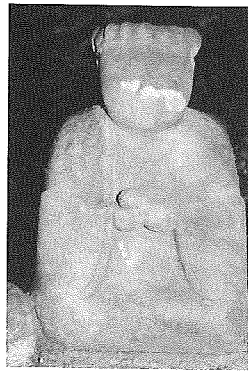
産活動が活発化してくると、単に仏教上の信仰のみならず生産活動や金融的経済的諸機能にも拡張解釈されて、近世に見られた講のように、経済上・社会上・文化上の集団にも適用されるようになった。

講集団をその機能から大別すると信仰的機能をもつ講、社会的機能をもつ講、経済的機能をもつ講に分類される。ここでは信仰的講集団に限るが、十干十二支や、太陽、月といった民間信仰と関わりをもった講や有名社寺に参拝するという講がある。民間信仰の講は待行事をとまなうものが多く、廻り番に決められた宿に集まり、夜通し四方山話に時を過ごすというものである。社寺参拝は、多くの費用を要するので個人で簡単に負担できるものではなかった。そこで、講金を積み立て、くじ引きや一定の順番によって選ばれた代表者が参拝する代参講という方法をとった。選ばれた代参者は積立てた講金を路銀にして社寺参拝にでかけ、神札を持ち帰って各自に配付するという方法がとられた。

近代になると、講の持つ宗教的意義はしだいに薄れ、本来の精神を逸脱して、行楽や宴食を主とする形に変わってきた。今では本来の信仰が忘れられたものも多いが、ムラの中にはかつての信仰の遺物といえるものが多数祭祀されている。また、神社の境内には集落や山内に祀られていたものが、諸般の事情により寄せられたものも多い。

1 観音信仰

わが国に現存するあらゆる仏像のなかでもっとも多いのが観音像である。観音信仰は法華経のなかの「観音経」(観世音菩薩



十一面観音 頭上に十一面(善薩面、忿怒面、笑面など)をつけた観音で、救済の働きが多面的であること象徴する。

(上小副川西古賀)



六地藏(その1) 地藏が六道を輪廻転生する衆生を導くという信仰から六地藏が生まれた。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に分身を作っている。一石に二体ずつ彫ったものである。(東畑瀬 旧宗源院前)



耳ひき地藏 耳が悪い人は火吹き竹を借りて掃り耳にあてて吹くとよいという。直れば新しい火吹き竹を供える。(上小副川東古賀)



子育て地藏 子安観音と同じように、子どもの無事な成長を願った子育て地藏が各地に祭祀されている。かつては病氣平癒などで不在のときがおおかった。(古場板の原)

活を安穩にし病氣による苦しみな

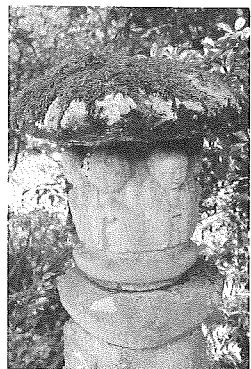
3 薬師信仰

薬師如来は修行中に衣食住の生

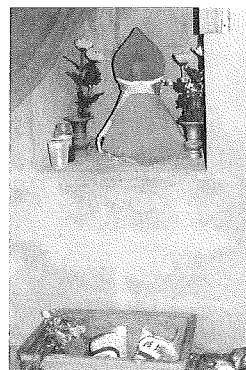
八月二十四日に行われる。

行事では、男児により地藏の縁日、
子育地藏として、子どもの守護神として信仰されるようになった。夏の火つけ
にひろまるにつれ、現世利益を期待して祈る多彩な地藏が生まれた。なかでも
かんになり、いろいろな供養塔の本尊として用いられた。地藏信仰が庶民の間
仏として祈願された。江戸期になると路傍の石仏の代名詞になるほど造立がさ
近世になってさらに民間信仰と結合し、庶民のあらゆる願いをかなえてくれる
がさかんになるに伴い流行し、

人間道・天上道)の衆生を救済
するといふ菩薩で、像形は立像、
坐像がある。一般には右手に錫
杖左手に宝珠の姿が多い。わが
国では平安期に極楽浄土の信仰
がさかんになるに伴い流行し、

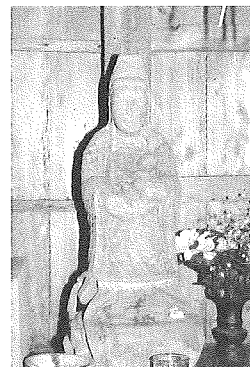


六地藏(その2) 寺院の門前や墓地の入口に見られることが多い。石幢に六地藏を彫りだしたものである。(市川 西福寺)

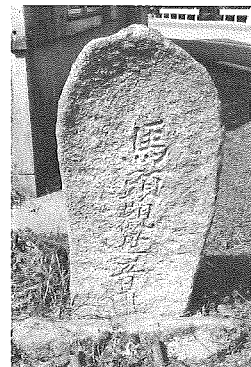


塩嘗め地藏 商売に行くときに塩を供えていくとうまくいくという伝承がある地藏である。もとは国道の上の大木付近にあったが、道路拡張により現在地に移転した。(栗並)

日時を決めて観音講が古賀内の女性で行われている。
つけをし、各家から豆を抜き、参拝者にお茶と煮豆で接待をする。また、毎月、



子安観音 子を抱く子安観音が女性の講により祭祀されている。昔は子どもが無事に育つということはなかなか確実なことではなかったのだ。 (大野原)



馬頭観音 牛馬の安全を祈願する観音として広く信仰されている。観音の多くは慈悲相であるが、馬頭観音だけは憤怒の相をしている。富士町では文字塔のみ確認している。(栗並)

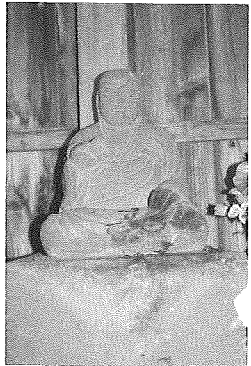
普門品)に説かれている。観音菩薩は衆生を救うために三三の姿に身を変えると語られている。そのようなことから、さまざまに観音が考え出された。千手観音・十一面観音・馬頭観音・如意輪観音・救世観音などである。
また、観世音菩薩を本尊とする三三か寺を巡礼すると功德が得られると信じられ、現世利益の色濃い仏として、平安時代末になると三三か所の巡礼が始まった。その後、江戸時代になると数多くの地方霊場が成立した。

集落内の観音堂では、夏の行事として祇園、灯籠つけと称される祭りが行われる。女兒たちが、堂内の掃除や飾りつけをし、各家から豆を抜き、参拝者にお茶と煮豆で接待をする。また、毎月、日時を決めて観音講が古賀内の女性で行われている。

2 地藏信仰

観音とならんで民間にひろく親しまれている菩薩の一つである。釈尊の入滅ののち弥勒仏の出現するまでの間、六道(地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・

ゆかりの寺院八八か所を巡るものであるが、各地に八八か所を模した小域霊場が造られた。彼岸に訪れる参拝人（お遍路さん）の接待が行われていたが、最近では廃止になった地域が多い。集



弘法大師 全国を行脚したという弘法大師の信仰は広く分布している。左手に念珠、右手に金剛杵を持つ大師像が祭祀されている。春秋の彼岸には多くの巡礼者が訪れる。（下無津呂）

天保四年八月吉祥日（一八五三）

6 弘法大師信仰

大師といえは弘法大師をさすほど、民間信仰のなかにとけこみ、庶民に親しまれ信仰されている人はない。弘

法大師とは平安初期の僧空海のこと、真言宗の開祖として遍

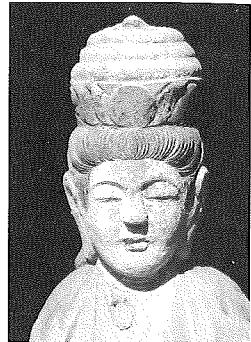
照金剛ともよばれ、俗に「お大師さま」と呼び親まれている。

弘法大師には四国八八か所の霊場巡りの遍路がある。大師に

模した小域霊場が造られた。彼岸に訪れる参拝人（お遍路さん）

の接待が行われていたが、最近では廃止になった地域が多い。集

業にはいる前でもあるので、道公役や河川の公役なども行われる。石祠の前で祭りの後、相撲などが行われ持ち寄った酒肴で宴を行う。



弁財天 弁財天は近世になり美しい女神の像として表現されるようになった。神使である蛇を頭上にいただいている。（須田御殿）

5 弁財天信仰

弁財天は本来インドの土着の神で、インド神話では河川の神として尊崇されていた。民間信仰では福神の一つで、中でも美しい女神といわれ、琵琶を持つ姿から音楽の神ともいわれている。弁財天の縁日は巳の日とされ、巳は蛇で、水神の神使という感覚がある。

五月の巳の日を中心として祭りが行われている。この時期は農作



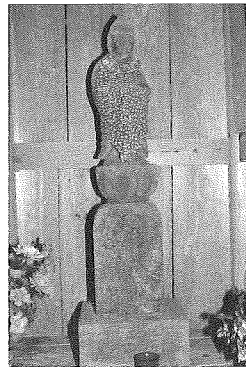
十二神将 薬師如来の眷属で十二の大願に順応して現れた分身ともいえるもので、薬師・甲冑神将とも呼ばれる。天衣・甲冑をつけた十二人の武将の姿に表される。（中原・観音堂）

どをはらう大願をたてたという。このことから万病を治し、医薬をつかさどる仏として信仰された。薬師信仰の篤さは観音、地藏について薬師如来の堂宇が多いことからわか

温泉と結びついた薬師信仰は、温泉の守護的な意味合いを持っており旅館では屋敷神として祭祀している。八月にトウロウつけの祭りが行われている。

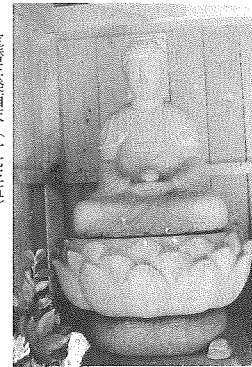
4 文殊信仰

「三人寄れば文殊の知恵」と言われるように文殊菩薩は知恵の仏として子どもたちの勉強ができるようにと信仰されている。子どもたちによるモウシ（文殊）講が行われている。一月の初めに子どものある家を廻り番に宿にしゼンザイなどをして食べる。モウシは孟子との混同も見られる。

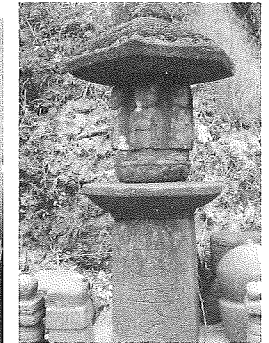


文殊菩薩 天神(菅原道真)とともに学問の仏として子どもたちに深く信仰されている。（袖の木）

宝暦二癸酉天（一七三五）二月吉日



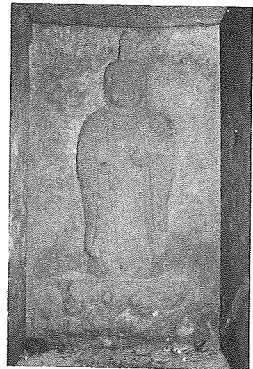
薬師如来 温泉の守護神として祭祀されている。両手で薬壺を捧げ持っている。（古湯 鶴霊泉）



六地藏(その3) 竿部に「逆修為」と刻してある。逆修というのは、生前に供養する為に建立されたものである。（上菖蒲）

8 伊勢信仰

庚申信仰とともに近世において隆盛を極めた信仰であったが、現在はかつてのような信仰は見られなくなった。路傍や神社境内に数多く見られる「大神宮」「天照皇大神宮」などと刻された石祠が伊勢講の記念碑である。伊勢講は伊勢信仰つまり三重県伊勢に鎮座する伊勢神宮（天照大神を祀る皇大神宮〔内宮〕と豊宇気毘売神を祀る豊受大神宮〔外宮〕とからなっている）の信仰集団である。伊勢神宮は天皇家の祖先神として皇室の信仰を受け、その庇護を受けていたが、時代を下るにしたがって武士階級に支持されるようになり、さらに御師によって農民や商人の間にまで広く浸透していった。御師というのは祈禱師から始まるといわれるが、祈願・奉幣をとりついでり参詣者に宿を提供したりした。この御師の活動により地域単位による



伊勢講碑(その2) 天照大神の神像を彫ったものである。現在は和町東山田宗源院境内に移転している。(東畑瀬 旧宗源院)



伊勢講碑(その1) 伊勢講の講員が全員代参を完了したときなどを記念して造立した記念碑である。自然石に窪みをつけ「天照大神宮」と刻まれている。(上小副川 猿若神社境内)

嘉永元年戊申十二月二十八日 若猿

8 伊勢信仰

どの庚申講にちなむ石祠が数多く残っている。「庚申」「青面金剛」「猿田彦大神」などと刻まれた石碑である。猿田彦大神は日本書紀や古事記に現れる国津神で、天孫を道案内した神であるが、庚申の神となったのは、垂加神道の山崎闇斎によって説かれてからで、江戸中期以降明治にかけて民間に広く普及した。

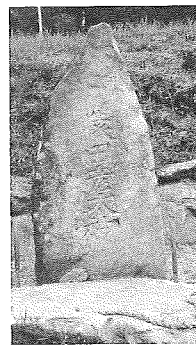
落の観音堂や地藏堂などに必ずといっていいほど、併せて祀られている。明治、大正、昭和といった近年に祀られたものが多い。

7 庚申信仰

かつては隆盛を極めた信仰で、現在は消滅してしまった信仰のひとつである。講という形式をとって行われていたが、すでに古老の記憶にないので、実態は明らかでないが、六十日に一度めぐってくる庚申の夜に、その夜は眠らずに過ごして健康長寿を願うという信仰である。

庚申の夜は眠らずに過ごすというのにはいくつかの説があるが、なかでも道教の三尸説によるものというのが有力である。人の身体のなかには、三尸という虫が宿っていて、庚申の夜に三尸が身体を抜けて、天帝にその人の罪状を上げる。天帝は罪によって生命を短くするので、眠らずに三尸の天上を防ぐというものである。

明治期までは盛んに行われていたらしく神社・堂宇・路傍な



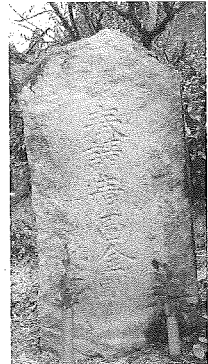
庚申(その3) 自然石に猿田彦大神と刻んである。猿田彦は天孫降臨の神話に登場する神である。江戸時代後期に神道家により庚申と結び付けられたものである。(下無津呂)

寛政六甲寅(一七九四) 三月吉祥日 猿田彦大神



庚申(その2) 扁額に猿田彦と刻されているが像は青面金剛である。剣を持ち足下に邪鬼を踏んでいる。(市川)

明治十七年甲申三月吉日



庚申(その1) 青面金剛は庚申の本尊として江戸時代に全国的に多く造られた。青面金剛と文字を刻む塔が圧倒的に多い。(下関屋)

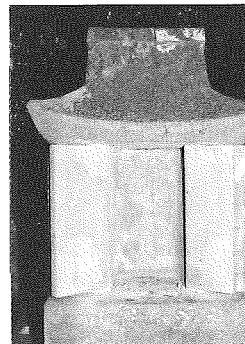
享保八癸卯年(一七三三) 奉請青面金剛 霜月吉祥日

伊勢講の組織がつくられ、日本全土に伊勢信仰が普及するようになった。伊勢の本宮への参拝は多大な経費と日数をよめることから地方に分霊された神社への参拝が行われていた。その一つ、福岡県志摩町の桜井神社に正月から初春にかけて参拝する集落が多い。慶応四年（一八六八）の参宮帳によれば、三月に上瀬屋、三瀬、下関屋、藤瀬、古場、大野、市川等から、四月、九月に畑瀬、小副川、熊川等から参拝しており、現在も参拝を続けている集落もある。また、一月十一日に佐賀市の伊勢神社へ参拝し伊勢講をしている集落も多い。

9 英彦山信仰

福岡・大分両県界に位置する英彦山（一一九六m）は、修験の霊場として幾多の栄枯盛衰をくりかえしてきた。英彦山の信仰圏はほぼ九州一円に広まっていたが、もつとも盛んであったのは肥前であった。

英彦山神宮の参道入口に、高さ七mほどの青銅製の鳥居がある。佐賀初代藩主鍋島勝茂が寛永十四年（一六三七）に寄進したものである。また、下宮、中宮、上宮など、何度も改修、再建されているが、それを行ったのは歴代の佐賀藩主で、現在のものは幕末の佐賀藩主鍋島齊正が再建したものである。このように藩主率先しての英彦山信仰は、領民もこぞってこれにならった。



英彦山石祠 彦山三社大権現の石祠。石祠の中央に種字三尊が刻まれている。（大野・春日神社境内）

鍋島紀伊守藤原朝臣直頼
御武運長久御子孫繁盛処
別當権大僧都観世院源盛



役行者 役小角とも優婆塞とも呼ばれる。奈良時代に活躍した呪術者である。役行者の超人的な行動は、修験道の中にとり入れられ、神格化され修験道の祖として祀られるようになった。（古湯・英彦山神社境内）

藩政期、庶民が許された唯一の旅は信仰の旅であった。信仰に始まった旅はいつしか旅を口実とした物見遊山の旅へと変化した。伊勢参りや本山詣では一生に一度可能かどうかという旅であったが、英彦山は比較的、近距離であったので大いに流行した。参詣の時期は春と秋が多かった。春は三月十四日、十五日の松会（元来は二月に行われていた。現在は五穀豊穰を祈る御田祭として行われている）にあわせての参詣が行われた。田植え前の農閑期でもあり、本年の五穀豊穰を祈願するために参詣を盛んに行なった。また、九月には牛馬の守護神として信仰の篤い豊前坊の祭事にあわせての参詣が多かった。

参詣は代表者が参拝する代参講という方法をとった。貝野では、九月に四名の代参者が参拝をし、翌日の夕方、全員が神社で代参人を中心にして酒宴をした。古湯には英彦山神社があり、英彦山権現の石祠が祭祀されている集落もある。

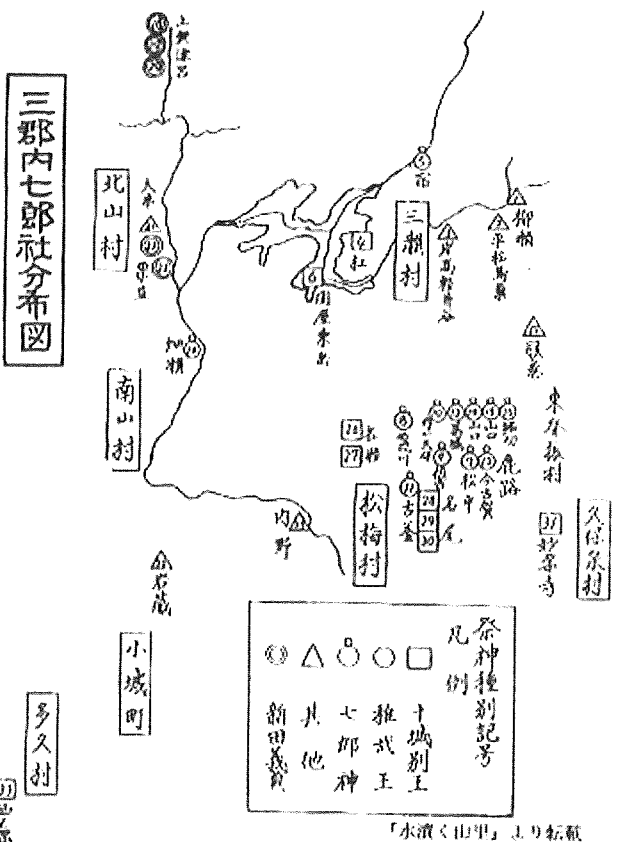
文化十二年八月吉日（一八二五）

10 二十三夜信仰

特定の月齢の夜に集まり月を礼拝する行事である。富士町内では二十三夜が最も普遍的で、三夜待ち（三夜さん）という。二十三夜



二十三夜尊（その1）二十三夜の主尊は勢至菩薩である。二手を合掌して蓮台の上に座している。（内野）



主として神社明細帳により
合祀以前の所在地である

七郎神分布一覽

番号	所在地	祭神名
34	三瀬村柳瀬	少名彦神
33	鳥巢	十城別王
32	岸高野井谷	十城別王
31	杠田宇倉	七郎神
30	小関村関屋東岳	七郎神
29	宿	七郎神
28	春振村鹿路松平	七郎神
27	鹿路佐古	七郎神
26	鹿路内川久保	七郎神
25	鹿路今古賀	七郎神
24	鹿路古釜	七郎神
23	鹿路山口	七郎神
22	鹿路葛城	七郎神
21	鹿路山口	七郎神
20	鹿路堀切	七郎神
19	服巻橋詰	七郎神
18	北山村七無津呂大東	新田義貞
17	上無津呂堅田	新田義貞
16	大串一本杉	新田義貞
15	栗並	新田義貞
14	南山村畑瀬	七郎神
13	内野通江	稚武彦天皇
12	松梅村松瀬宇土	十城別王
11	松瀬白田	十城別王
10	松瀬西名尾	十城別王
9	名尾	十城別王
8	久保泉村川久保妙薬寺	十城別王
7	小城町岩薮西谷	稚武雄神
6	多久村西ノ原	若武王尊
5	西多久村板屋宮ノ原	稚武王命

〔水濱く山里〕「郷土研究第五号」昭和29年3月31日
花山院福忠調査より作成

11 七郎神信仰

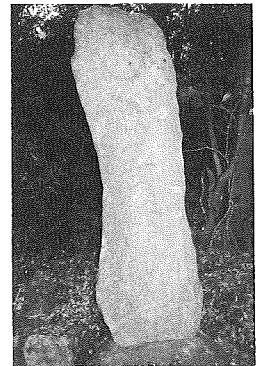
七郎さんと呼ばれる神が、富士町を始めとして、三瀬村・脊振村・大和町・多久市などに分布している。多くは石祠であるが神殿を構えたものもある。



七郎神(その1) 南朝の忠臣、新田義貞といわれている。七郎さんと親しまれている所以は明らかでない。(内野 七郎神社)

北山ダム建設にあたり昭和二十八年に水没地域の調査が佐賀県郷土研究会により実施された。そのおりの調査における分布図と表をかがけておく。
神名は少彦名神、十城別王、七郎神、志々岐神、新田義貞、稚武彦天皇、稚武王など多彩である。
十城別王と稚武王は日本武尊の子で、神功皇后(息長帯比売命)が三韓への出兵のときに従軍した。凱旋後、十城別王を下松浦郡志自伎(平戸市志々岐神社)に留め、三韓に対する警備に当たられた。
日本武尊には六人の夫人に六人の異母兄弟がいるが、十城別王と稚武王のほ

の本尊は勢至菩薩の化現であるという説によるもので、勢至の有縁日は二十三日とするところから、月に對する礼拝を二十三夜に行うところから「二十三夜さん」という。
二十三夜は男性の信仰が多いが、女性の信仰としては二十六夜講があり、お六夜さんと呼ばれている。



二十三夜尊(その1) 「廿三夜尊」と刻まれている文字塔である。高さ2m30cm、幅56~67cmほどの自然石である。(葛尾)

寛政六巳九月吉祥日(一八五九)

かに足仲彦尊あしなかつひこのみことがいる。足仲彦尊は一四代仲哀天皇ちゆうあいのみかどで皇后は神功皇后である。稚足彦天皇は第一三代天皇の成務天皇のことで武内宿禰を大臣として政治を行った。少彦名神は出雲の国造り神話にでてくる神で大己貫神おのおのぬかみと協力をして国造りをした神である。以上のように、神功皇后に関係する神々や南朝の忠臣など明確な信仰がなくなっている。

町内には分布一覧表の他にも多くの集落で祭祀されている。

12 九郎神信仰

九郎さんと呼ばれる石祠や神像が多くの集落に祭祀されている。七郎神と同様に性格が明らかでないが、いくつかの説を記しておく。

(1) 阿蘇惟直の弟九郎とする説

『太平記』によると

「・・・阿蘇大宮司惟直ハ、先日多々良浜ノ合戦ニ深手ヲ負ヒタリケルガ、肥前ノ國小杵山ニテ自害シヌ。其ノ弟九郎ハ、知ラヌ里ニ行キ迷テ、卑シキ田夫ニ生擒レヌ。秋月備前ノ守ハ、太宰府迄落タリケルガ、一族二十余人一所ニテ討レニケリ。・・・」とある。

大宮司八郎惟直の弟、九郎惟成は原隼人の背によって古湯にきて、温泉

の効で回復し、九郎堂を建立して永住したという。原隼人の子孫により、淀姫神社境内の碑の前で九郎さん祭りが行われていた。

(2) 藤原氏の一族とする説

小城町晴氣本山の下宮天山宮縁起書には、「天山はそれ以前は禪定山（嵩）といった。持統天皇（六八七―六九六）のとき、対島より夷賊侵寇のとき勅命により参議藤原安弘（藤原九郎康弘ともあり）下向し、食邑を晴氣里に賜う。文武天皇の大宝元年（七〇一）安弘は天山の八合目に石祠を建てて上宮とし、天女（弁財天）の飛来を奏上す」とある。

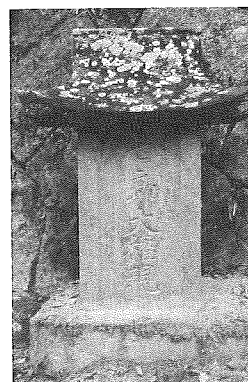
下宮天山宮の三百戸の内浦谷の入口に当る松葉に九郎堂が路の両側に祀られ、祭神に藤原房前ふじはらのふささきとその子真楯またてを天山開発の恩人として祀っている。三里の鏡神社の祭神が藤原広嗣であり、房前の甥で、真楯とは従兄弟関係にあるのも、藤原氏のこうした勢力関係と無縁とも思えない。（『小城町史』）

(3) 源義経とする説

明治初年に長崎県に提出した『小城郡神社明細帳』によれば、九郎神の祭神は源義経としてある。大野春日神社、下合瀬鏡神社、栗並子安神社、藤瀬藤瀬神社の祭神の一人に源義経が祭祀されている。上合瀬では、口承で源義経と伝えられている。

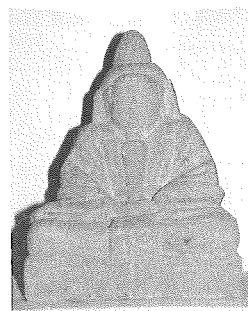
奉再建明治十六年秋
七郎大権現

施主
嘉村浄平
嘉村金左エ門
吉左エ門
仁助
八十吉
（上無津呂 淀姫神社）



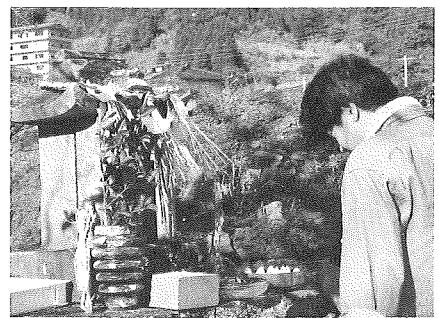
七郎神（その2）

貞享四「卯祀 十二月十六日（二六八七）
茂松拾左門



九郎神 衣冠東帯の神像で、8月18日に男の子どもたちにより「九郎さんのとうろうつけ」が行われる。（上合瀬）

文化十二年を多四月二日（二八一五）
九郎大明神
宮柱 松尾松右衛門



九郎さん祭り 下小副川の矢櫃では、12月10日に近い日曜日に九郎さん祭りが行われる。数字の九にこだわり供物や神社の飾りなども九に合わせる。黒米（くろう米）、かけの魚を九つ、つくる。神社境内の木に新藁をまくがこれも以前は九本の木にしていた。（矢櫃 H10.12.20）



やぶさ神(その1) 扁額に「矢房宮」と刻してある。ヤブサさん祭りを12月の中旬にしている。(中原) 矢房大明神 文政二巳卯仲冬五日(1819)

夏には天満宮の灯籠つけなどの行事が行われている。
「養父」「流鏑」などと彫られた小祠が祭祀されている。やぶさ神は富士町のほか、長崎県下松浦地方、佐賀県内では伊万里市や東松浦地方に多く分布している。

15 やぶさ神信仰

やぶささん、やぶ神さんと呼ばれ、「八房」「矢房」「矢武佐」「養父」「流鏑」などと彫られた小祠が祭祀されている。やぶさ神は富士町のほか、長崎県下松浦地方、佐賀県内では伊万里市や東松浦地方に多く分布している。

素盞鳴命・大己貴命・息長帯比売命・少名彦命・天穗日命・保食命・木花咲夜姫など、唐津市中里

の矢房神は天穗日命、伊万里市大川町峰の矢房神は大己貴命、富士町の矢房神は明治初年の『小城郡神社明細帳』によれば保食神とある。

これは明治維新以降に記された資料によるもので、祭神名が一定しないのは本来の祭神が忘れられて、いろいろに変わったものと思われる。

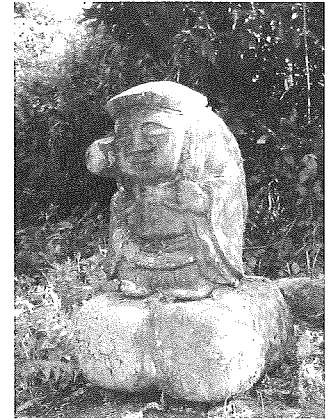
鎌原の鎌王神社境内と葛尾に「天台矢武佐」「天台流鏑」と彫られた石祠がある。天台と冠されているのは天台密教山伏の関与を思わせるものである。

長崎県の資料からは松浦党に関係の深い地域に多く見られ、松浦家においては城内に祭祀し除魔招福を祈願したという。



やぶさ神(その2) 「天台矢武佐」と刻されている。(鎌原 鎌王神社境内)

宝曆八庚寅九月吉祥日(二七五八)



大黒天 大国主命との習合もある。大黒天は五穀の豊穡の神として南山地区の農村部での信仰が厚い。南山地区の集落に多く祭祀されている。(鎌原)

ほかに、山留の九郎神社は、川上から首のない武者の死体が流れついたので祀ったという伝承がある。

13 大黒天信仰

恵比須とともに福神の代表である。大黒頭巾をかぶって左肩に大きな袋を背負い、右手に打出の小槌を持って米俵の上立っている。インドや中国では寺院の守護神として古くから祀られており、日本では寺院の護法善神として始めは食堂に祀られていたが、のちに大国主神と習合して豊穰をつかさどる神として、農村部に多く建立されるようになった。

14 天満天神信仰

氏神社としての天満宮を含め、天満宮の石祠が祭祀されている集落は多い。天神は太宰府に流されて不遇のうちに亡くなり怨霊となった菅原道真を祭祀するもので九州では特に多い。始めは天神としての怨霊神としてに性格が強かったが、のちに学問の神として民衆化し、天満宮としての信仰が強くなった。道真の薨去の日が二月二十五日なので、祭日を二十五日として、

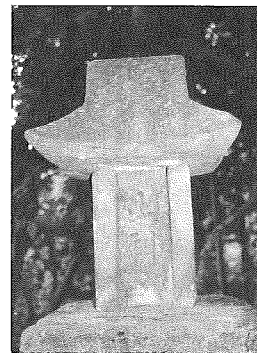


天満宮 菅原道真は怨霊と学問の神という二様の性格を持つ現人神である。(東畑瀬)

16 山の神信仰

山間に住む人々にとって山はタキギ、草、茅などの供給地として、山から与えられる恩恵ははかり知れないものがあつた。そのような山に人々は神の存在を信じ、これを祀って守護を念じ感謝の念を奉じた。

山の神の民俗的な信仰としては、春に山から里に降りてきて田の生育を見守り、秋の収穫が終われば山に帰るといふ信仰がある。富士町は山村であるが山の神の石祠は比較的少ない。その信仰形態が明らかでないので、どのような目的で建立されたのか不明である。



正徳四年十一月吉日(二七二四)
山神
若衆中
杉山村三十八人

山神 山の神の性格は明らかでないが、山から受ける恩恵は計り知れないものがあつた。もと、杉山鉸業内の杉の大木の下付近にあつたが、現在は集落入口の道路沿いの山の中に移されている。(杉山)

17 権現信仰

権現というのは仏や菩薩が衆生を救う方便として権(かり)に人の姿などを示してあらわれることを意味し、日本に仏教が伝来されてから日本伝来の地主神との習合が思想的になされるとともに神祇を仏の菩薩のかりの姿であるとしてその神に権現といふ称号を与えたのである。主なものとして、熊野三所権現、山王権現、愛宕権現、



大檀主肥前刺史四位侍従松平信濃守藤原□茂朝□
建立佐嘉郡如瀬村藏江白山大権現石殿
明和三丙戌歳八月吉祥日座主宮司河上山(二七六六)
あなた権現 権現山山頂白あ
付近の杉林の中にある。ものであ
山権現を祭祀したものである。(関屋宇東岳)

英彦山権現、白山権現、東照大権現などが見られる。大串西谷の権現社は徳川家康(東照大権現)を祭祀したものと
のといふ。

権現山の頂上に近い地に「あなた権現」といふ石祠が祭祀されている。「富士町誌」によれば、佐賀藩祖鍋島直茂が病氣のとき、かねて尊崇あつた白山権現に病氣平癒の祈願をした。その甲斐あつて祈願成就ができたので、佐賀平野を見渡せる場所に白山権現社の分霊を勧請したといふ。

須田の権現社は、武運長久の神で戦時中は、出征兵士の参拝が多かつた。

18 若宮信仰

市川の西福寺の裏山に「正一位若宮大明神」が祭祀されている。明応六年三月、太宰の少貳政資は周防の大内義興に攻められて、多久に逃れて専称寺で自害をした。政資の子高経も市川において大内氏の追手に討たれた。無念の死を遂げた高経の霊が崇つて、近くの橋上から人馬が落ちる事故が相次ぐので、村人が西福寺裏山に石祠を建立し祀つた。それ以後は人馬落ちの事故はおこらなかつたといふ。馬との関わりがそれとなく物語られているが若宮は牛馬の神として信仰されており、東畑瀬の宗源院前の若宮大明神も牛馬の神として信仰されていた。

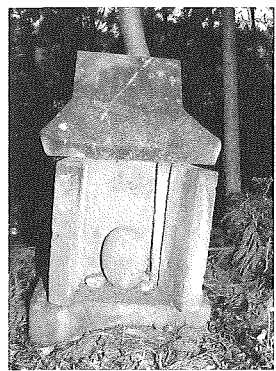


若宮大明神(東畑瀬 旧宗源院前)

安政二年卯七月十三日(一八五五)

19 井手の神

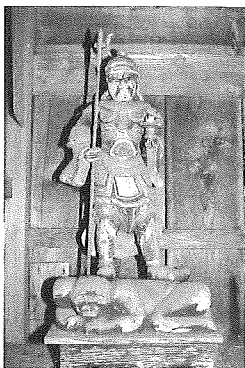
湯の里橋の上部に内野の堰がある。現在はコンクリート造りの立派な堰であるが、大正の始め第一発電所ができきる前までは芝の堰であった。そのため、大雨が降るたびに決壊し、その度に大勢の人がかり出され復旧工事にあつた。



いでの神 杉林のなかにひっそりとたたずむ石祠に小さな丸い石が供えられている。(内野)

正徳三年(一七一三)、突然の大雨に堰は流され、復旧工事は遅々として進まず、人々の苦悩は増すばかりで社寺で祈祷まで行われるようになった。内野に新吾左衛門という農民がいた。新吾左衛門も毎日工事にでて一生懸命働いた。ある夜、疲れて寝ていると、夢枕に七郎神が現れて、「工事がはかどらないのは、水神の怒りがあるからで、誰か人柱に立てば水神の心も和み工事は完成するだろう」というものであった。新吾左衛門はそのことを、翌朝、役人に告げた。役人は人柱まではと思つたが、いつまでたつてもはかどらぬ工事に、とうとう人柱を立てることにし、人々を集めてその話しをした。進んで人柱にたとうというものなどなく、とうとう役人は仕方なく「左ないのアシナカを履いた者を人柱に立てる」と言い渡した。左ないのアシナカを履いた者は新吾左衛門一人であつた。普通、左ないのアシナカを履くことはないの、新吾左衛門は七郎神が夢枕にたつたときから人柱に立つのは自分しかないと思つて決めていた。新吾左衛門の犠牲により、さしもの工事も完成をし、枯れかけていた田に水が行きわたるようになった。

その後、内野の人々は新吾左衛門の霊を慰めるべく浄財を募り石祠



毘沙門天 右手に宝棒を持ち、武装忿怒の形で邪鬼の上に立っている。七福神の一員でもあるが守護神として祭祀されたものであろう。(東畑瀬)

20 毘沙門天信仰

四天王のひとつで、四方を守護する護法神として北方に配されている。常に道を守つて説法を聞くことから多聞天とも呼ばれ、武装忿怒形の像で足下に邪鬼を組み敷いている。東畑瀬では、八月三日に堂(毘沙門天堂)の祇園が行われていた。

義徳浄流居士 正徳三己歳八月十日

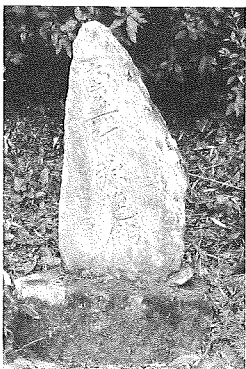
内野新吾左衛門事内野堰二人柱ニ立セシニ依リ井手神ト崇メ村中ヨリ祠堂銭八貫目施入ス又七郎社ハ託宣ノ冥加ニ付宝殿〇殿ヲ建ル也

を建立し、井手の神と崇めたという。伝説のような話であるが、内野の西光寺の過去帳に次のように記されている。

21 經典供養塔

百万遍念仏塔 百万遍とは「南無阿弥陀仏」を百万回唱える念仏行事である。念仏の回数が多いほど功德もまた大であると信じられ、百万遍念仏の達成に庶民のささやかな願望が託され、その完了を記念して各地に百万遍念仏塔の造立をみた。「奉唱念仏百万返現世安穩後生」、「奉唱彌陀寶號一百万遍」、「奉唱満念佛一百万遍」などがある。

元禄五手天八月吉祥旦(一六九二) 南無阿弥陀仏



名号塔 (西高野岳)



ハチダイチオウ 自然石が円形に配された素朴な祭祀形式がある。(菅木持万)

23 八大龍王
八大龍王は、仏教で法華経説法の座に列したという八種の龍王。ちなみにインドから伝承されたもので、仏典では仏法の守護者として姿を現し、説話では暴力的な権力者のようでもある。八種の龍王のうち、娑伽羅龍王が海や雨をつかさどるとされるところから航海の守護神や雨乞いの本尊とする。柚の木が集落では、干ばつのときに八大龍王碑の前で火を焚くと、熱さに耐えかねた龍王が雨を降らすという口承が伝えられている。

菅木の持万古賀の裏山の八合目あたりに、通称ハチダイチオウ（八大地王）が祭祀されている。三、四〇センチの自然石を中心にして周囲を八個ほどの小さな自然石で囲ったような配置がしてある。性格は明らかでないが、八大龍王ではないかと思われる。昭和初年の祭りまでは青年相撲が盛んであった。



八大龍王（柚の木）

享保元酉天（二七一六）十一月吉日

24 疱瘡神
近世から近代にかけて、もっとも脅威を奮った伝染病の一つに疱瘡（痘瘡・天然痘）がある。高熱を発し、悪寒、頭痛、腰痛を伴い、顔面に発疹を生じアタが残る。感染性が強く死亡率が高いが種痘によって予防できるようになった。ちなみに一九八〇年にWHOにより絶滅宣言がだされている。

名号塔（念仏塔）

「南無阿弥陀仏」の六字を名号といい阿弥陀如来の名をたたえるものである。南無は絶対帰依を表し「阿弥陀仏に帰命する」という意味がある。浄土教が浄土宗、浄土真宗などの教団を通じて広まり、個人や念仏講などの信仰団体が念仏を数多く誦することが流行した。

読誦塔 特定の教典を読誦した記念に建てたものである。教典はもともと読誦することを目的としたものであるが、何部または何遍読誦したかということを銘文としたものである。「奉読誦大乘妙典一千部」と刻されており、法華経を読誦したものである。

一字一石塔 教典を書写することを写経というが、本来の写経は紙か布に書写するものであるが、小石に一字ずつ経文を書写して地に埋め、書写した教典の名とその目的などを彫った塔を建てるといいうものである。町内には大乘妙典（法華経）の一字一石塔がある。

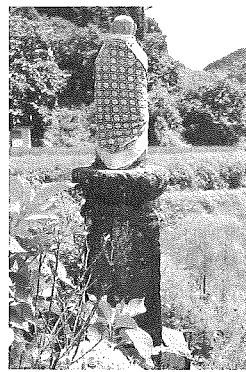
22 三界萬靈

三界とは仏教のことはで欲界（食欲、性欲等欲の世界）、色界（物質の世界）、無色界（欲も物もない世界）の三つをさしている。この世の生きとし生けるものすべての霊をこの塔に宿らせ、回向することによって、すべての霊を供養することができるという意味で建立された。



延享二乙年三月吉日（二七四五）大乘妙典一千部

読誦塔（古湯・英彦山神社）



三界万霊塔 寛政七年二月吉日（二七九五）谷田村 子共中

三界万霊塔（下小副川谷田）

菅木の床浦神社は疱瘡の神としての信仰が篤かった。昭和の初めころにも疱瘡が流行り、多くの参拝者が訪れ、以前は婦人会により疱瘡よけの神札が配られていた。また、鎌原の正法寺境内に「疱瘡之亡者」の碑がある。

25 寄進物ほか

社寺には多くの寄進物がある。その大半は為政者によるものであるが、庶民の願いを込めた講中によるものや若者たちによるものも多い。

(1) 鳥居

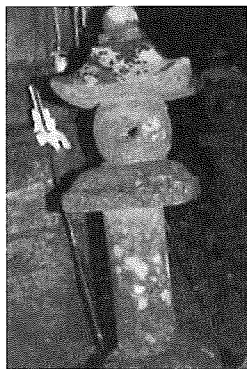
鳥居の起源については諸説があるが、神社の付属建築物の中でも日本独特の簡素な形を完成させたものの一つである。多くは明神鳥居という近世に一般化した鳥居であるが、佐賀県には「肥前鳥居」という室町時代末期から江戸時代初期ころ（一五〇〇〜一六〇〇）に建立された鳥居がある。笠木と鳥木（二本の柱の上端に渡してある石材）が形式化して一体となり、両端の木鼻はゆるやかに反り、柱は二・三本継ぎのいけ込みになっている。



肥前鳥居（上無津呂 淀姫神社）

(2) 石灯籠

古く仏堂前の献燈用具として大陸から伝来したと思われる。石灯籠は最初は寺院のみに用いられていたが、やがて神社でも用いられるようになった。江戸時代には常夜塔として、神社の参道や入口に置かれるようになった。



石灯籠（大串 権現社）

正徳四年二月吉祥日（一七一四）

(3) 狛犬



肥前狛犬 四肢と胴部の間はくり抜かれず、細部の表現を省略した愛嬌のある狛犬である。（下小副川 天満神社）

狛犬の起源は、中国の漢の時代に守護的な意味から廟所の前方に石彫りの獅子が置かれたことに始まり、日本には仏教に伴って伝えられたと考えられている。狛犬（高麗犬）の名が示すように異国の動物であり、霊力をそなえるにふさわしい魁偉な風貌は守護神としての性格を如実に示している。狛犬は一对のもので、一方が口を開き一方が閉じる阿吽の形をとっているものが多く、唐獅子形狛犬と肥前狛犬と称する二種の狛犬がある。唐獅子形狛犬は全国的に見られる一般的な狛犬の系統に属していて、頭髪は巻毛か梳毛、体に巴文を有するものが多く、玉をとったりくわえている。

肥前狛犬と称される狛犬は、江戸時代前期に県内に分布した石造狛犬で、全体的に小形で細部の表現を単純化した極めて素朴でユニークな狛犬である。

(4) 丁石と道標

古くは俗塵を離れた山深い地に社寺を建立し修学研鑽の場とした。丁石は目的地までの参道が長いことから何丁と道標を兼ねて距離を示したものである。道標も丁石と同じ目的で建立されたもので、道に迷うことなく目的地の社寺まで道案内できるように案内の銘文が彫りこん



丁石 須田権現社鳥居横にある丁石。「従是七丁」と刻されている。

である。

(5) 絵馬と天井絵

社寺の拝殿や堂宇内に絵入りの板額「絵馬」が奉納されている。絵馬の起源は古代に崇敬する神の社に生馬を捧げる習わしがあった。こうした生馬にかわって土馬や木馬など、馬の作り物を神に供えるしきたりが生じ、さらに時代がくだり、板に馬の絵を描いた絵馬奉納の習俗が生まれた。したがって馬の絵が

本来の絵馬であるが、祈願や記念に絵馬を奉納するようになると描かれる図は祭礼・農耕・神話・武者・合戦・

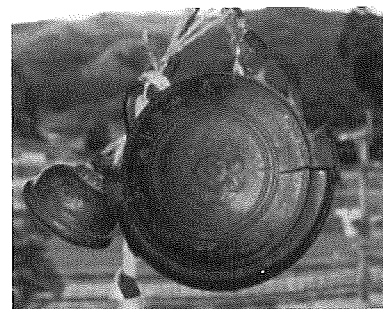
天明二寅三月吉日(一七八二)

歌仙絵などと多様化してきた。

天井絵は、社殿の天井を飾るために描かれた絵で、絵馬と同様、祈願のために奉納されたもので近世以降近代にかけてのものが残っている。

(6) 鰐口

偏平円形の鐘で、下端の割れ口の形がワニ(鰐)が口を開いた様子に似ていることからこの呼び名が生まれたのである。神社や寺院、堂宇の軒下に懸けてあり、前面に垂らした布紐を振り、鼓面を叩き鳴らして礼拝するものである。



鰐口 参拝者はぶらさげられた綱を振ってうち鳴らし、神仏に願いをとどけようとする。(中原 薬師堂)

(二) イエの信仰

座敷の床の間の横に仏壇を設け、神棚は鴨居の上というところが多い。神棚には神宮大麻や各地の神社や崇敬神社から受けてきた御札や集落の祇園祭りで配られた護符などが納めてある。ほかに破魔矢や絵馬、集落のおくんちのときに奉納される浮立の縁起物などが飾ってある。仏壇は宗派によりかなり異なるが、先祖の位牌や仏像等が安置してある。浄土真宗の家庭では立派な仏壇に阿弥陀如来の仏像や軸が中央に掲げられている。日々の扱いは神棚は毎朝供物の飯と茶(水)をあげ、一日と十五日にはサカキをあげる。ほかに大黒天、荒神等が祀られており、屋敷地の隅には屋敷神を祀っているところもある。

小さな大黒天の像を一升マスの中にたくさん入れて祀ってある。旧十一月の子の日には棚から下ろし、二股大根などと一緒に祀られる(「四年中行事・(四)秋から冬の行事・8子の日祭り」参照)。

便所の神の意識はあまり強くないが、女性神なので髪を結っていかないと引つ張られるという。妊娠しているときに便所の掃除をよくすると綺麗な子が生まれるという言い伝えもある。

1 荒神信仰

クドの上に棚を設けて祀ってある。正月にはクドの形をした餅に丸餅を二つ重ねて、ツンノハを敷きミカンと干し柿を添える。家によっては荒神さん餅を三重ねにして干し柿、ミカン、栗などを供える。荒神さん餅は一月



絵馬 享和3年(1803)に奉納された武者絵の絵馬。(藤瀬神社)

九日にひいて、焼いて食べるが、未婚の女性が食べると縁遠くなるといっていた。

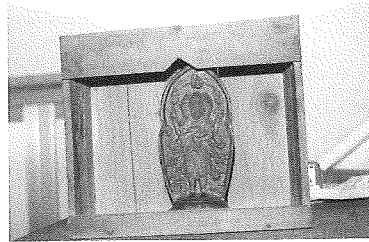
田植えの後、田植え終いの早苗三株を荒神さん苗といって、クドの上に供えておき、枯れたらひいておき、盆前の八月十二日ごろに、この苗を使って仏具を磨く。また、雷が鳴ったとき荒神さんの上ですばらかすと雷が落ちないという。遠方にでかけるときには荒神さんに参っていけといわれ、顔にヘグラ（鍋や釜の底についたスス）をつけてでかける。なにかあったときには荒神さんがひっぱってくれるという。

火は生活に欠かせぬ大切なものであるが、反面、一瞬にして全てのものを焼失するという危険性を持っているので、火伏せの信仰がなされていた。火伏せの神としては八天信仰がある。小城の焼山に祭祀される八天神社に正月に集落で参拝するところが多い。

座頭がきたときには読経をしてもらい、正月には塩配いさんがきて、クドに塩をおき、供えてある餅を貰って帰る。

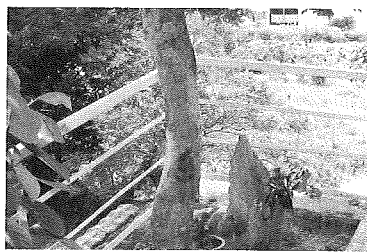
2 屋敷神

屋敷内の一隅に屋敷の鎮守神として祭祀されている。家人の信仰の対象として祭祀されるので、その神仏は雑多で、観音や地藏といったものから性格の不明なものまである。なかでも多いのは、中央さんと呼ばれる神で屋敷の隅に祀ってある。踏んだりしたら熱がでるといわれているので、掃除をするときは注意をした。一日と十五日にお茶やサカキを供えるぐらいで特別な祭りはない。



三宝荒神 カマドの神、荒神は神名の通り荒ぶる神とされる。火の力を抑えるためにはそれだけの力が必要なのであろう。三つの顔を持ち忿怒相(怒った顔)である。(下合瀬)

市場直次郎（『中央考』「佐賀民俗第九号」）によれば、「地神をかまど神と同 一神格であるとし、かまどを神座とする荒神に対してこれと区別して荒神を中央神と称したと思われるふしがある。——中略——肥前盲僧が伝承する。「仏説地神大陀羅尼王子経」によれば、かまど神と地神が同体であり、しかも中央に位置して守護するというのであるから荒神信仰の流布した民間で、地神を中央神と称して崇敬したであろうことは想像して難しくない」とある。



中央さん 屋敷の一隅に祀られている神で、自然石をそのまま立てたものが多い。中央さんと呼ばれているが、その性格ははっきりしないが、屋敷の守護神として祭祀されている。(山留)

3 訪れる宗教者

(1) 山伏

ヤンボシさんといっていた。冬の寒い時期に法螺貝を吹き祓いをして水をかぶって、各家を廻っていた。お礼に米や金を渡していた。

(2) 座頭

盲僧で主としてカマド祓いなどをする僧で、天台宗玄清法流に属していた。小城や佐賀の八戸、神埼から正月（二月）と秋の二回ほどきていた。正月過ぎは寒さが厳しくなる時期になるので、座頭風といって、座頭が来るのと冷やなる（寒くなる）と言っていた。また、座頭が来ると縁起がいいともいった。各地を廻っているので、祝儀の相手探しの相談などもした。泊まり込みで集落を廻り、各家では経を読み琵琶を弾いていた。お礼は春には麦を秋には米や金銭を布施として渡す。昭和四十年代ぐらいまできていた。